

ICF における評価方法について

The rating method in ICF

足立 恵子
ADACHI, Keiko

はじめに

私たちの生活圏内を見回してみると、多くの物が溢れているが、利用者である人々はそれらが提供してくれる機能に満足できないことも多い。

物の活用は人の生活の質にさまざまな影響を与えるので、たえず適切な設計と活用方法を模索しなければならない。いうまでもなく福祉分野についても同様であるが、高齢者、障害者や子どもに関しては、とくにその配慮が必要であろう。

物と人との接点である生活の場で、物が意図した通りに活かされ、より多くの人々により良く利用されるためにどのような視点への配慮が必要なのか、それらはどういう形で具体化することができるのか。

これを考えているうちにたどり着いたのが、こうしたニーズを総合的に捉えるために提案されている「生活機能分類=ICF」の体系にそって分析できないかということである。ICFの分類体系のなかで人々の活動と参加の状況に注目して、人々のニーズを評価し、それらをとりにまく環境因子を関連付ける分析手法の利用可能性を検討してみたいと考えた。

この論文は上記の視点にたつて、ICFの手法を現実の生活場面に当てはめて具体的な評価方法を考察したものである。

この問題の中心テーマは、生活機能における活動と参加に関する評価項目の選定と、それらの評価値をどう付けるかということであるが、それを検討する過程で、一般に評価とはどういうことかという基本に立ち返って検討することも必要であった。

1. ICF の仕組み

ここではICF全般についての説明は参考文献¹⁾に譲るが、一言でいえば、ICFは健康という視野で生活機能と障害の評価に関して、心身機能、身体構造、活動と参加の3つの視点からとらえ、これらに影響を及ぼすと思われる環境因子を関連づけて評価する仕組みである。

評価項目は内容の詳しさとレベル区分されているが、心身機能、身体構造、活動と参加の項目では第3、4レベルを合わせて約1400項目余で、そのうち今回焦点をあてる活動と参加では第3、4レベルで約380項目余である。同じく環境因子では第4レベルで約180項目がリストされている。

先にも触れたようにこの研究では、これらの項目群の中からICF体系の一つの特徴である活動と参加に焦点を当ててみたい。

活動とは、個人による課題や行為の遂行のことであり、参加とは、生活・人生場面への関わりのことである。したがって活動と参加の実行状況の評価とは、ある人の生活に関して、ある時点、ある環境で

その人が受けている活動制限（活動困難性）、参加制約（関わりにおける経験の難しさ）のことであり、能力の評価とは、そうした活動、参加において（支援が必要かどうかに関わらず）なんらの支援もなしに行われた場合の実行状況である。

実行状況と能力という2つの評価点の差をみることによって、当該環境におかれた人の実行状況の改善への手がかりを得ることができるのである。

各項目の評価には下表のような5段階のレベルが付けられている。

右側の%数値は、この累積度数で区切ること各レベルの意味を規定する基準とするものである。この意味などについては後で4章で述べるが、評価結果の妥当性の問題、同一の評価対象についての他の評価者による評価結果との比較という問題と関連している。なお、コード8と9についての説明は参考文献¹⁾を参照されたい。

0 問題なし	0-4%
1 軽度の問題	5-24%
2 中程度の問題	25-49%
3 重度の問題	50-95%
4 完全な問題	96-100%

-
- 8 詳細不明
 - 9 非該当

（1）実行状況と能力についての評価点の表記のしかた

実際の評価結果をどのように表すかについて、歩行と移動に関する項目群の中からd4500の短距離歩行を例に、その評価点の表記の仕方を見してみる。

短距離の歩行が軽度の困難な状態にある人の評価は d4500.1_ と表記される。この表記において _ で示した小数点以下2桁目の部分には能力についての評価点が記入される。支援なしで能力を発揮することがかなり困難であれば、この第2評価点は d4500_.3 と記される。ここでは小数点以下1桁目の部分は実行状況についての評価点が記入される部分である。このように実行状況の評価点は各評価項目の小数点以下の1桁目で示し、能力の評価点小数点以下2桁目で示される。

こうして得られた評価点を合わせて d4500.1.3 という評価点から歩行と移動d4500については、1と3の差だけの改善をおこなうべきと判断できる。ただし能力については、これを評価する際の同一の条件を整える問題（参考文献¹⁾参照）が難しいので、今回はこの能力の評価は扱わないこととした。

なお、状況の改善をどのようにおこなうかについて検討するためには、能力の評価とともにd4500の実行状況に関連すると思われる環境因子についての評価内容をみなければならない。つぎにその環境因子について、上記と同じように意味を考えてみる。

（2）環境因子について

環境因子とは人々の生活をとりまく物的な環境や社会的環境の状況、さらに広くは人々の社会的な態度など、人のおこなう活動や参加に影響を及ぼす因子である。

環境因子は各人の属性に即して、本人の立場に立って客観的に評価されなければならない。障害がある人は、その障害をもった人の立場に即して評価されることになる。

環境因子の評価点は、その因子がどの程度に活動や参加に関して促進的にはたらくか阻害的に影響するかを示すものである。促進因子の場合は、ある資源の利用のしやすさ、それが信頼できるものか変化しやすいものか、良質であるか粗悪であるかなどを考慮する必要がある。また阻害因子の場合にはその因子がどれくらいの頻度で人に困難を与えるか、困難度が大きい小さいか、困難を避けられるか否かを考慮する必要がある。さらに環境因子はそれが存在すること（例えば障害のある人に対する否定的な態度）、あるいは存在しないこと（例えば必要なサービスが得られないこと）のいずれによっても阻害因子となりうることも考慮されなければならない。

ひとつの環境因子がどの程度促進的あるいは阻害的に作用するのかを区別するため、その程度を示す評価値に小数点（.）を付した場合は阻害因子、（+）を付した場合は促進因子を表すことになっている。

例えば、e115（日常生活における個人用の生産品と用具）は日々の活動において用いる装置や身に付けたり身の回りで使用するものを指すが、手すりが設置されていて移動がかなりし易くなっている場合、e115+2と表し、手すりの設置がなく、わずかばかり支障を来している場合はe115.1と表すことになる。

2. 評価の場の想定と評価項目の設定

1章で、1、2といった数値を用いて評価水準を表したが、何を基準にしてその評価点を付けるのかについて、以下で実際の生活場面に当てはめて説明してみたい。

人が日常的に活動し参加する具体的な場面で、その実行状況を描き、それに関してどのような活動制限や参加制約があるのか、またそれらに影響を与えていると思われる環境因子をとり出し、これらがどの程度、そうした活動や参加を促進または阻害しているか評価してみたい。

実際に評価をおこなうに当たり、まずどのような評価項目をとりあげ、それらをどのような評価基準で評価するかを決めなければならない。

これらは、どういう場で評価をおこなうのかという場の想定と切り離しては考えられないことはいうまでもない。

（1）評価の場の想定

まず、本研究では評価の具体的な場として、筆者の身近な環境である「短大の食堂」をとり上げることとした。下記にその様子を写真と共に具体的に描写しておく。

食堂は円筒形の建物の2F、3Fに位置し、その1F西側、中央、東側の3箇所のらせん状の階段であがってくる。2Fは建物の北側に位置する厨房と南側に位置するダイニングと注文した食事が出されるカウンターがある。ダイニングには、さまざまな形のテーブルが58個、椅子は262脚が配置されている。

3Fは利用スペースがドーナツ型になり、テーブル数23個、椅子138脚テーブルと椅子が配置されている。

エレベーターは食堂東側の入り口の手前に設置され、1階と2階の間を連絡しており、重量制限750kg、定員数11名、車椅子が2台入れればほぼ1杯となる。

付属設備として、2Fの厨房の東側に売店、自販機、食券販売機、厨房の前にパン販売コーナーがあり、その向かい側、すなわちダイニングに面してお茶、ソース・ドレッシング、箸・スプーンの設置、電子レンジが設置されている。

食堂の風景



なお、ICFでの評価は、個人単位でおこなうよう想定されているが、大勢の人たちが利用する食堂における活動と参加について評価する場合には、食堂を利用すると思われるさまざまな属性の人たちを想定して、その個々についての評価を頭の中で平均して評価値としなければならないことに留意する必要がある。

(2) 評価項目の設定

(1) でみたような仕様の「短大の食堂」に関して、その活動と参加、環境因子を評価しようとする場合、1章で説明したようなICFのリスト項目群(参考文献¹⁾参照)から、どのような項目を選べばよいのであろうか。

ここでは、あまり厳密に選定したものではないが、以下に見られるように、活動と参加に関して4項目(d項目)、環境因子に関して7項目(e項目)を選んでみた。

次にこれらの各項目を食堂の評価に使えるように、その場に即した具体的なことばで表現しなければならない。というのも、ICFの各項目の定義は、一般的に利用できるように配慮されており、そのために抽象的で複合的な意味が含まれており、具体的な個々の場に適用するにはその場に即してイメージできるように表現し直す必要があるからである。

ここでは、引用が長くなるが参考文献¹⁾でICFが定義している各項目の原文を再掲し、それらに対する解釈と言い換えた表現を併記する。

なお、参考文献¹⁾に指摘されているように、現在ICFでコード化する評価値は、生活機能について、その場に居合わせる個人が感じる参与感や満足感ではないことに注意しなければならない。

これを、d550食べることを例にして考えると、食堂の利用者の、食器の使いやすさ、人と共にする食事のしやすさというのは、その人が「どの程度満足しているか」を評価するのではなく、はたから評価者が客観的にみて「どの程度達成できているか」を評価しなければならないということである。

以下では、こうした点に留意して項目の意味を解釈し、その結果としてその項目をどのように表現しなおすかを各項目の最後に記述した。

(活動と参加の項目)

d 550 食べること

提供された食べ物を手際よく口に運び、文化的に許容される方法で食べること。例えば、食べ物を細かく切る、砕く、瓶や缶を開ける、はしやフォークなどを使う、食事をとる、会食をする、正餐

をとること。

【解釈】短大の食堂という環境において、ときにはグループで話しながら、どの程度円滑に食事ができるかということと解釈する。

【項目の表現】食堂で食事はし易いか

d 6200 買い物

代金を支払い、日々の生活に必要な物品とサービスを入手すること（仲介者に買い物をするよう指導や監督することを含む）。例えば、店や市場で食料、飲み物、清掃用具、家庭用品、衣服を選択すること。必要な物品の質や価格を比較すること。選択した物品、サービス、支払い交渉と支払い、物品の運搬。

【解釈】メニューの選択・交渉、代金支払い、セルフサービスによる物品の選択と運搬がどの程度円滑にできるかということと解釈する。

【項目の表現】食堂での注文で選択・交渉、セルフサービスはし易いか

d 6600 他者のセルフケアへの援助

家族や他人のセルフケアを援助すること。他者への食事、入浴、更衣の援助を含む。例えば、子どもや病人、あるいは基本的なセルフケアに困難のある家族を世話すること。他者の排泄を援助すること。

【解釈】食堂を利用する障害者、子どもや高齢者などの活動と参加に対する援助がどの程度円滑にできるかということと解釈する。

【項目の表現】食堂で支援対象者への援助はし易いか

d 9205 社交

非公式な一時的な集まり（例えば、友人や親戚の訪問、公的な場での非公式な集まり）へ関与すること。

【解釈】食堂において仲間などのお茶程度のミーティングや会食がどの程度円滑にできるかということと解釈する。

【項目の表現】食堂で気軽に親密な交流ができるか。

(環境因子項目)

環境因子は、以下にみるように、一般的にはある活動・参加に対して促進的／阻害的の両面（両義的）で影響するであろう。しかし食堂のように人為的に設計・設置・運営される環境では、その環境は、そこで営まれる活動・参加を促進することを意図して整えられているのであり、阻害的な側面ははじめから除外されているものと考えたこととした。

e 1550 私用の建物の出入りに関連する用具

私的な利用のために計画・設計・建設された人工的な環境への、出入りに関連する生産品と用具。例えば、自宅の出入り口、携帯用または据え置き式のスロープ、自動扉、ドアの把手、水平ドアの出入り口などの設計や建設。

【解釈】食堂への出入り口の幅や敷居、床の素材などの仕様や品質および自動ドアなど付属品の性能（造り）の適切さということと解釈する。これらは適切な品質・仕様であれば活動・参加に関して促進的な働きをするが、不適切であれば阻害的に作用すると考えられ、両義的と考えられる。

【項目の表現】食堂の出入り口は通り易いか。

e 2151人口密度

土地の単位面積あたりの人の密度で、高密度や低密度などの特徴を含む。

【解釈】これは適度であれば促進的な働きをするが、過度になると阻害的に作用すると考えられ、両義的と考えられる。

食堂における人口密度は、食事のしやすさと食堂内の移動のしやすさに影響し、これは椅子の配置数と配置の形（食べ易さ、移動のし易さ、なごやかさ）がゆったりしているかということと解釈する。

【項目の表現】食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか。

e 2250気温

暑さや寒さの程度。例えば、気温が高い・低い、平均的気温、異常気温。

【解釈】食堂の気温は、本来は食堂における活動・参加を促進するために調節して提供される環境（室温）であり、その意味で促進的な因子であるが、高すぎたり低すぎたりすれば、活動・参加を阻害することになる。したがって、環境因子としての気温は両義的と考えなければならない。

ここでは食堂外の環境状態に応じて調節されている室温という促進的な意味と解釈する。暑い屋外から食堂へ入ると適度に調節された温度が心地よく感じられることはよく経験されることであろう。

【項目の表現】食堂の室温は適切に調節されているか。

e 230自然災害

個人のまわりの物的環境を破壊する地理的あるいは大気の変動で、定期的あるいは不定期的に起こるもの。例えば、地震、厳しく猛烈な天候条件〈例：トルネード（大旋風）、ハリケーン、台風、洪水、森林火災、着水性嵐〉。

【解釈】「自然災害」とのみ記述されているが、この意味は、そうした災害発生時での対処（たとえば避難）のしやすさと考えたい。自然災害発生は、どのような活動・参加に関しても阻害的な因子である。食堂の利用中に発生が予想される自然災害による危険性回避のし易さということと解釈する。

この項目のように、地震発生時に予想される危険性回避のし易さを評価するには、かなり専門的な視点が必要となる項目もあり、その評価は容易ではない。

【項目の表現】食堂で自然災害発生時の危険性を円滑に回避ができるか。

e 325知人・仲間・同僚・隣人・コミュニティの成員

職場や学校、娯楽、その他の生活場面において、知人や仲間、同僚、隣人、コミュニティの成員としてお互いによく知っている人々。これらの人は、年齢や性別、宗教的信条、民族などの人口統計的特徴を共有するか、共通の興味や利益を追求している。

除かれるもの：団体と組織に関するサービス（e 5550）。

【解釈】これはまわりにいる顔見知りで親しい人たちの多さ（援助の可能性、和やかな雰囲気）を評価するものであり、一言で言えば、和気あいあいとした雰囲気であるかどうかということと解釈する。促進的な因子である。

【項目の表現】食堂は和やかで気安い雰囲気か。

e 340対人サービス提供者

個人が日常生活や仕事、教育、その他の生活状況における実行状況を維持することを支援するのに必要なサービスを提供する人々。それらは公的または私的な資金によって、あるいはボランティアとして提供されるサービスである。例えば、家事と家の維持管理への支援の提供者、人的補助者、

移動補助者、有料ヘルパー、乳母（ベビーシッター）、その他の主たる介護者として働く人々。
除かれるもの：家族（e 310）、親族（e 315）、友人（e 320）、一般的な社会的支援サービス（e 5750）、保健の専門職（e 355）。

【解釈】食堂における参加と活動を維持するため、注文を確認し食事などを配膳・下膳する、会計で清算するといった食堂のフロントサービスに携わるひとの人数の適切さということと解釈する。これは促進的な因子である。

【項目の表現】食堂のフロントサービスは適切か。

e 5800保健サービス

身体的、心理的、社会的な安寧を得るために、個人に介入することを目的として、地区やコミュニティ、地域、地方自治体、国家などのレベルにおいて提供されるサービスやプログラム。例えば、健康増進や疾病予防のサービス、プライマリケアサービス。急性期のケアやリハビリテーション、長期にわたるケアのサービス。コミュニティや在宅、学校、職場、一般病院、専門病院、診療所、ケア施設（入所型・適所型とも）などの多様な形態で、公的あるいは民間の資金によって、短期的または長期的に、また定期的あるいは一時的に提供されるサービス。これらのサービスの提供者を含む。

【解釈】これは食堂利用者に対する食品衛生上の配慮、急病人発生に対する体制であり、一言でいえば衛生管理体制の充実水準ということと解釈する。促進的な因子である。

e 340対人サービス提供者とは保健的であるかないかという点で区別される。

【項目の表現】食堂の衛生管理は適切か。

3. 短大の食堂の状況評価

ここでは、以上の考察をもとにして、食堂における生活経験において利用者がどの程度の制限・制約を受け、それらに関して環境因子がどの程度影響しているかを評価する手がかりを得るために、これらの関連性をみておくこととした。

そして具体的に評価点をつけるために以下の（2）でみるような調査表を作成して評価をおこなった。

（1）活動・参加項目と環境因子項目の関連内容

実際に各項目について評価をおこなう前に、各項目の評価の視点をより具体的にイメージするために、短大の食堂において、活動・参加の実行状況（d）に対して環境因子（e）がどのように関連しているかを、表のように各ボックスに記入して具体的に記述する。

一印の箇所は関連はないとした部分である。

e 2151/d 550 一食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか／食堂で食事はし易いか
食堂の混み具合やテーブル、椅子の配置のしかたは、落ち着いて食事することに影響する。

e 2250/d 550 一食堂の室温は適切に調節されている

	d 550	d 6200	d 6600	d 9205
e 1550	—	—		—
e 2151				
e 2250		—	—	
e 230	—	—		—
e 325				
e 340				
e 5800		—	—	—

- か／食堂で食事はし易いか
ゆっくりくつろいで食事をとるには適切な室温調節が望まれる。
- e 325/d 550 一食堂は和やかで気安い雰囲気か／食堂で食事はし易いか
食堂での食事のし易さは、単に物理的な環境だけではなく和やかな雰囲気が影響するであろう。
- e 340/d 550 一食堂のフロントサービスは適切か／食堂で食事はし易いか
追加注文やお茶のお代わりなどの円滑なサービスが食事をし易くするであろう。
- e 5800/d 550 一食堂の衛生管理は適切か／食堂で食事はし易いか
清潔な環境が食事のし易さに影響するであろう。
- e 2151/d 6200 一食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか／食堂で注文の選択・交渉、セルフサービスはし易いか
食堂混雑程度やテーブル配置によって注文、運搬サービス、清算などのし易さが影響される。
- e 325/d 6200 一食堂は和やかで気安い雰囲気か／食堂で注文の選択・交渉、セルフサービスはし易いか
食堂の雰囲気が諸々のコミュニケーションを円滑にするであろう。
- e 340/d 6200 一食堂のフロントサービスは適切か／食堂で注文の選択・交渉、セルフサービスはし易いか
食堂における主要な行動である注文、運搬サービス、清算を支えるサービスが大切なことはいままでもない。
- e 1550/d 6600 一食堂の出入り口は通り易いか／食堂で支援対象者への援助はし易いか
食堂に入りにくいような要支援者がいる場合、その必要性を見渡せるかといった点も大切であろう。
- e 2151/d 6600 一食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか／食堂で支援対象者への援助はし易いか
利用人数が適切で、テーブル配置などが程よくなされていれば、必要に応じて食堂内を円滑に移動して支援対象者のセルフケアへの援助がしやすいであろう。
- e 230/d 6600 一食堂で自然災害発生時の危険性を円滑に回避ができるか／食堂で支援対象者への援助はし易いか
たとえば地震発生時の危険回避策への配慮のうちには、同時に支援対象者への援助という視点も必要であり、影響することは明らかであろう。
- e 325/d 6600 一食堂は和やかで気安い雰囲気か／食堂で支援対象者への援助はし易いか
周りに親しい知人等がいれば、セルフケアの援助もし易くなるであろう。
- e 340/d 6600 一食堂のフロントサービスは適切か／食堂で支援対象者への援助はし易いか
要支援者に対する援助で、フロントサービスの適切な協力が得られればなお援助がし易いであろう。
- e 2151/d 9205 一食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか／食堂で気軽に親密な交流ができるか
利用人数が適切で、スペースがゆったりしていれば交流がしやすい。

- e 2250/d 9205—食堂の室温は適切に調節されているか／食堂で気軽に親密な交流ができるか
適切な室温であれば快適な交流ができる。
- e 325/d 9205 —食堂は和やかで気安い雰囲気か／食堂で気軽に親密な交流ができるか
周りに親しい知人等がいれば、心おきなく交流が出来る。
- e 340/d 9205 —食堂のフロントサービスは適切か／食堂で気軽に親密な交流ができるか
さり気ない行き届いたサービスの提供があれば円滑な交流ができる。

(2) 食堂に関する評価表と評価結果

以上の検討を経て、食堂の評価について表のような調査表を作成し評価を試みた。
なお、右端の欄は筆者による評価結果である。

短大の食堂における活動・参加に対する制限・制約レベルと環境因子の影響レベルの評価表

項目コード	項目の意味	評価0	評価1	評価2	評価3	評価4	評価結果
d 550	食堂で食事はし易いか	とてもし易い	ある程度し易い	し易いとはいえない	かなりしにくい	とてもしにくい	2
d 6200	食堂で注文の選択・交渉、セルフサービスはし易いか	とてもし易い	ある程度し易い	し易いとはいえない	かなりしにくい	とてもしにくい	2
d 6600	食堂で支援対象者への援助はし易いか	とてもし易い	ある程度し易い	し易いとはいえない	かなりしにくい	とてもしにくい	2
d 9205	食堂で気軽に親密な交流ができるか	とてもし易い	ある程度し易い	し易いとはいえない	かなりしにくい	大変しにくい	2
e 1550	食堂の出入り口は通り易いか	とても通り易い	ある程度通り易い	通り易いとはいえない	かなり通りにくい	とても通りにくい	1
e 2151	食堂の椅子の数と配置はゆったりしているか	とてもゆったりしている	ある程度ゆったりしている	ゆったりしているとはいえない	かなり窮屈である	とても窮屈である	2
e 2250	食堂の室温は適切に調節されているか	とてもよく調節されている	ある程度調節されている	調節されているとはいえない	かなり調節が悪い	全く調節されていない	1
e 230	食堂で自然災害発生時の危険性を円滑に回避ができるか	とてもよく配慮されている	ある程度配慮されている	配慮されているとはいえない	かなり配慮が不足している	全く配慮されていない	2

e 325	食堂は和やかで気安い雰囲気か	とても和やかで気安い雰囲気である	ある程度和やかで気安い雰囲気である	和やかで気安い雰囲気とはいえない	かなりぎこちない雰囲気である	大変ぎこちない雰囲気である	1
e 340	食堂のフロントサービスは適切か	とてもサービスが行き届いている	ある程度サービスが行き届いている	サービスが行き届いていない	かなりサービスが悪い	とてもサービスが悪い	2
e 5800	食堂の衛生管理は適切か	とてもよく管理されている	ある程度管理されている	管理されているとはいえない	かなり管理が悪い	全く管理されていない	2

上記の評価結果を見ると、短大の食堂での活動と参加に関する実行状況（活動困難性、関わりの難しさ）は、一般的に表現すれば「中程度の問題」をもつ（いわゆる普通の状態）といえよう。

以下では、今回とり上げた4つの活動と参加の項目 d 550、d 6200、d 6600、d 9205 に対して、環境因子が実行状況の評価にどのように影響しているのかについて、若干説明を加えておきたい。

d 550 で評価が低いのは e 2151、e 340、e 5800 の評価の低さが影響しているであろう。

すなわち、利用者のゆったりと食事がしたいという要望に対して、テーブルと椅子の配置がそれに十分にできていないこと、さらにフロントサービスが足りないこと（お茶がなくなっていたり、ドレッシングがなくなっていたりすることに配慮する人が不足している）、テーブルの衛生面の配慮や箸・スプーン等の衛生管理が徹底していないことがあげられる。

d 6200 で評価が低いのは、e 2151 と e 340 の評価の低さが影響しているであろう。

すなわち、食堂内で買い物をしたり、交渉やセルフサービスをする場合にテーブルや椅子の配置がそのし易さをやや損なっていること、フロントサービスを行う人数が不十分であることがあげられよう。これらのサービスにゆとりと暖かさが加われば、サービスを受ける人の実行状況は改善されるであろう。

d 6600 で評価が低いのは e 2151 と e 340 と e 230 の評価の低さが影響しているであろう。

すなわち、食堂内で、支援が必要な人への支援のし易さは、テーブルや椅子の配置が影響し、フロントサービス担当者の協力の有無が影響しているであろう。

d 9205 で評価が低いのは、e 2151 と e 340 の評価の低さが影響しているであろう。

すなわち、テーブルと椅子の配置に余裕がない点とフロントサービスがやや行き届いていないことが影響していると思われる。

以上から、食堂において親密な交流をする場合、交流するグループのメンバーが互いに適切な間隔を保つことが出来るようなテーブル配置、椅子の配置が必要であり、また他のグループからも、その交流が妨げられない距離感も必要となること、フロントサービスについては交流しているグループに対する行き届いた配慮、サービスに携わる人数が影響するであろうこと伺われる。

このように、食堂における活動と参加を制限し制約している要因としては、単に物的なものにとどまらず、人的、社会的な諸因子が影響を与えていることがわかる。

4. 評価の妥当性について

3章で示した評価表による筆者の評価づけの結果は、果たしてどこまで妥当だと言えるであろうか。

採用した評価0（問題なし、0点）から評価4（完全な問題、4点）までの5段階の評価づけの意味は、1章のはじめに掲げたICFの評価点のつけ方に準じたものであるが、1章で各レベルの横に記載されているパーセント表示とは関連づけられていない。

実は評価の妥当性を確保するには、このパーセント表示の取り扱いが関連してくる。以下でこの問題を少し理論的に考えてみたい。

(1) 評価結果のバラツキについて

一般にある評価対象に関して、ある評価項目に注目するとき、どの評価者から見てもその評価項目に対する評価点が全員一致しているということは珍しく、普通はばらついて採点されるであろう。実際、今回の短大の食堂について、3章の調査表を用いて数人の学生にも評価してもらったところ、各評価項目の評価点にはバラツキがみられた。

このバラツキがなぜ生じるのかを、さらに調査範囲を拡げて本学院の食堂だけでなく、いくつかの学校の同様の食堂について、それぞれ違う評価員が評価をおこなった場合の評価結果（今回はこのような調査を実施することはできなかったのも、理論的な考察にとどまる）のバラツキをとり上げてみる。

いくつかの学校の食堂の評価結果を相互比較するとすれば、それらの食堂の状況はさまざまであろうし、その学校の評価に関わる人の評価基準も筆者のそれとは異なるであろう。

このような評価をおこなえば、ある評価項目aの評価点は大変評価の高いレベル（評価点0）の学校から大変低いレベル（評価点4）の学校までがばらついて出現することだろう。こうしたサンプルを無作為に取り混ぜて100校（下表A～X）を抽出して評価して下表を作成し、その評価点を小さい0から大きい4へと順番に拾い出して並べると、000…0111…11122…233…3334…444 のように100個の数列になる。

他校の評価者 評価項目	他校の評価者				
	A	B	C	…	X
ある評価項目 a	3	4	2		0

この数列では、0、1、2、3、4の各個数がいくつになるかは判らない。

とにかくこの数列について、1章でみたICFのパーセント値の区切り方で、最初から5個目（5%）、最初から25個目（25%）、最初から50個目（50%）、最初から95個目（95%）、最初から100個目（100%）というように区切って5つのグループに分け、各グループを0、I、II、III、IVと名付けよう（ここでは判りやすくするために便宜上100校のデータにしたが、実際は抽出校を十分に多くとれば何校でもよい）。

ICFのパーセント値による区切りは、それぞれ問題なし、軽度の問題、中程度の問題、重度の問題、完全な問題という意味づけをもっている。この区切り方を固定して評価結果をレベルに分けることが大切なポイントであり、これにより各学校における食堂の状況の程度が統一的に解釈でき、比較できるのである。

もし100校を評価して、その評価点の分布が先の数列のようにできたとしよう。その数列で、グループ0には0のみ、グループIには1のみ、グループIIには2のみ、グループIIIには3のみ、グループIVには4のみが含まれているように0点、1点、2点、3点、4点の個数が分布していたら、それを「ICF的分布」ということにしよう。

実際にはそうなることは少ないであろう。グループ0には0点が含まれるが1点も混じるかもしれない。同様にグループIには、評価点1点以外に0点や2点も混じる可能性がある。他のグループについても同様である。このように、きっちりとはICF的にならない分布を「ずれた分布」ということにする。

評価結果の分布が「ICF的分布」であれば、評価点1をつけた学校の状況は全学校のうちの5～24%の範囲にあって「軽度の問題あり」と判定できることになる。一方、「ずれた分布」になった場合は、たとえば、評価点1がグループIとIIに出現することもあり、評価点1をつけた学校の状況は軽度の問題なのか中程度の問題なのかは判断できないことになる。これでは、評価点の意味は統一がとれない。

(2) 評価のバラツキの原因と較正

こうした「ずれた分布」はなぜ生じてくるのだろうか。

その理由はいろいろ考えられるであろうが、ここではその一つとして、評価者が認識する実際の状況と、それを表現する評価レベルづけの表現(評価用語)の設定・対応づけが、各学校の評価者たちでまちまちになっているケースが指摘できるであろう。これは評価対象の状況のイメージを評価用語と結び付ける際に、評価者に生じる偏りである。

その原因は、設問の内容が誤解を招く(これについては後述)ようなものでない限り、回答者の個性＝価値感や評価の経験の違いが反映されていると見ることができよう。

一般に行われているアンケート調査では、むしろ回答者の行う評価のばらつきを浮き彫りにすることが、一つのねらいである。そのばらつきを他の要因とすり合わせて分析を掘り下げることができるからである。

しかしICFの意図する評価に関しては、同じ評価対象の、同じような状態については、だれが付けても評価点と同じにならないと、評価結果に対する解釈の統一性を欠くことになり、それにもとづく対応策もちぐはぐな内容となる恐れがある。また評価結果から逆に元の状況を推測して比較することもできなくなる。このようなことから評価者によって付けた評価点がまちまちでは困るのである。

そこである評価対象に関して、多数の回答者の評価点が1であれば、その評価対象の評価点としては1が妥当という判断を下して、これと異なった評価を下した評価者の感覚は評価点を1になるよう訓練しなければならない。こうした訓練のことをICFでは評価感覚の「較正」と言っている。

このように、評価者の感覚を、評価対象の状態を測定する測定器(ものさし)であるとみなして、そのものさしとしての感覚を較正する必要があることになる。

このことは、ある評価対象を限定して評価をおこなう際、あらかじめその評価対象に関して評価者となる人の評価感覚を統一しておくということを意味する。

このような評価の仕組みは、たとえば食品の品質検査での官能検査として行われており、検査に携わる検査員の感覚を統一するために教育・資格試験が行われている。このことから考えると、今後ICFを利用する評価要員にも、分野別に評価感覚を一定にできるような研修が必要になると思われる。ただ、食品の官能検査のように、たとえば味覚といった感覚を頼りに行う場合に比べて、ICFの活動・参加の評価では感覚を離れた内容をイメージで捉えなければならず、評価行為に影響を与えらると思われる要因は広範囲で複雑なものに及ぶ可能性があり、困難性は高いといえよう。

上述のほかに、評価対象の状況のイメージを評価用語と結び付ける際に生じる偏りの一つの原因として、評価用語の表現・設定が適切でないことも考えられる。評価対象の状態は、それぞれの状態が人にとってどのような意味をもつかを基準としてレベル分けされ、区分・分類されるのであるから、その意

味を表現することばが、誤解されたり、あいまいだったりして適切さを欠いては、結果としての区分・分類は信頼できないことになる。

こうしたことから、評価結果にズレを生じさせないためには、評価する人の感覚がもつ評価基準を統一するとともに、評価用語を適切に選ぶことも大切なことであるといえよう。

このうち評価用語の適切化は、今回、食堂をとり上げてみた経験からみて、なかなか手間が掛かることであると思われる。いずれにしても、この両者は深い関係にあるといえよう。

まとめと今後の課題

本論文ではICFにおける活動と参加を環境因子と併せてどのように評価していくかを中心に、その評価項目の選定・解釈から、それらを用いて実際に評価して、ICFの体系の利用の仕方を理解するため、具体的な評価項目に整理して評価表を作成してみた。

例としてとり上げた食堂における活動と参加、その環境因子の評価では、具体的な評価対象について評価のイメージを固め、その内容を表す評価項目と段階的な評価に用いることば（評価用語）に表現しなおすという作業が求められた。

さらにこの事例をもとにして、評価の妥当性の問題を「較正」と関連づけて考察した。その結果、評価の妥当性を保証する（共通了解を得る）には、ICFを利用する分野ごとに評価に携わる要員の訓練が必要になることが示唆された。こうした体系的な取り組みが必要になることはICFでも指摘されている。

また、今回、食堂で試みたような評価項目の解釈と評価項目の表現のし直しは、相当の手間がかかることが判った。ICFを多方面の分野で利用する上で、こうしたことを適用分野ごとにおこなうというようなことは事実上難しいと思われる。したがって、もしそういうことなら、評価に携わる要員はICFが提供している定義表をそのまま用いて評価に臨まなければならない、ICFの定義について相当に高い理解力と想像力を求められることになりそうである。

なお、今回とりあげたような主観を交えた評価における評価点の与え方については、デザイン分野を中心とした感性工学などの各方面で質的は評価尺度の統計学的な研究もおこなわれており、福祉分野においてもそれらを援用することも考えて、より洗練された評価手法を模索していかなければならないであろう。

参考文献

- 1) 障害者福祉研究会 『ICF 国際機能分類』 2002年発行 中央法規出版
- 2) 蓮見 孝 『「熱い社会」をめざすユニバーサルデザイン』 2004年発行 株式会社工業調査会
- 3) 中川 聡 『ユニバーサルデザインの教科書』 2005年発行 日経 BP 社
- 4) 長町 三生 『感性工学』 1988年発行 海文堂出版株式会社
- 5) 鈴木 浩明 『快適さを測る』 2002年発行 日本出版サービス
- 6) 飛田 良文・浅田 秀子 『現代形容詞用法辞典』 2003年発行 東京堂出版